

触れただけ

南出謙吾

触れただけ（あらすじ）

南出謙吾

この作品は3つの場面からなります。それぞれの場面は独立していて登場人物も異なりますが、場面毎に一人、次の場面に間接的な関係を持つ人物が登場し緩やかな連鎖を形成させています。それぞれの場面は、目の前の男女関係のやりとりを中心に進みますが、世の中の昨今の余裕のなさやそこからくる危うさ、すさんだナシヨナリズムが、全体を薄く覆っています。しかしそれは背景にすぎず、あくまで軸は男女のちよつと滑稽な聞きあいとされています。

一場は、ある兄弟と、兄の彼女の3人。弟のマンションが舞台です。弟が家に帰ると、女（兄の恋人）が自分の家に居て、兄はベランダに。兄は女が飛び降りないよう見張っているという、のっぴきならない状況。

兄は、もともと所謂大手企業に勤めていましたが仕事のストレスで勤務困難になり辞めてしまいました。今は弟の元に転がり込んでいます。優等生だった兄にコンプレックスを持つている弟は、その状況に困惑しながらも、少し嬉しいのです。兄の恋人に秘かに恋心を寄せてしまうのもその表れ。直人はマンションの営業マンで日々厳しいノルマに追われながら、それでもそこにしがみつかざるを得ません。頭一つ出た生活水準を保っていることが、直人の兄に対する、そして奈美に対する、唯一の武器だと思ってしまうのです。奇妙な三角関係の聞きあいが続きます。

女は弟と一緒に住もうと提案します。弟は仕事で追い詰められていることの救いを女に求めてしまいます。女は、自分との対比で苦労した妹に対する思いや、片親で家庭環境に恵まれなかった男の子への恋心について話しながら、この兄弟との別れを予感します。乱立するタワーマンション、増え続ける交通量、ステリックになる車の流れが、3人の関係に対岸から不穏な影を落とします。

二場では、「女」の妹である高橋（梓）に、四十路の男大西が交際を迫っています。大西は、ある日買い物に出かけたまま家に戻らず、そのまま離婚をしてしまったらしい。二人は援助交際の関係で、大西はそれを、ちゃんとした交際と言いたいと言う。高橋は、付き合ってもよいと応えます。ただ、付き合っても良いが、お金はちゃんと欲しいと。自分の価値を認めてくれているのなら、お金を払うべきだしそうしてほしいと懇願します。きちんとした支払いがあるのであれば、結婚してもよいとささ言ひ出す。大西は徐々に論破され、支払ってもよいと考え始めます。どこまでのことをお金でやりとりするのが妥当で常識なのか、世間一般の感覚と二人の感覚は少しずれているのかもしれない。しかし、同級生たちと互角にラインしたり互角にスタバしたり互角にカラオケしたりしたい。互角にかわいい服も着ないといけない。決して経済的に恵まれていない家庭でもないのに平均の少し上で互角に渡り合える環境にしがみつくのは容易ではない。どこかで生活に困窮している人がいる中、この二人の間には切実で奇妙なお金の循環が成立しかけています。

三場では、大西の元妻、木下の元を、かつての恋人祐介が訪れています。同窓会と偽ったの再会。木下は祐介によりをもどそうと持ち掛けます。ふと寂しくなり紛らしてほしい。彼女のそれはとても節度ある依存です。その節度を祐介はうまく理解できず翻弄されます。大西と離婚してからの木下の生活は極めて質素です。学生時分から住んでいる古いアパートのまま、テレビも買い換えずついに映らなくなってしまうっています。近くのスーパーでパートをしながらの暮らし。周りには新しいマンションが次々に建築され、木下のアパートも立ち退きの時期が迫っています。木下はそれらを意に介さず暮らしています。祐介の中に、木下に何かできるのではないかと傲慢な優しさが芽生えますが、それは木下が求めているものではないのです。アパートの前の交通量はいよいよ激しくなり、時代はゆっくりと確実に変わっていきます。

場面と登場人物

1場 直人のマンション

直人（ナオト） 27歳 会社員。弟。

利男（トシオ） 29歳 無職。直人の兄。

奈美（ナミ） 25歳 利男の恋人。利男の元職場の派遣社員。

2場 和食レストランの個室

高橋（タカハシ） 21歳 奈美の妹。

大西（オオニシ） 40歳 高橋に迫るバツイチの男。

3場 木下のアパート

木下（キノシタ） 33歳 祐介の元彼女。

祐介（ユウスケ） 33歳 木下の元彼。大西の元妻。

触れただけ

1場 直人のマンション

たくさんの車の往来する音が聞こえる。
秩序だっているようで、時折ヒステリックな車も混じる。
明かりが入ると、そこは広いリビング。
ダイニングテーブルに女（奈美）が座って窓を眺めている。
その掃き出しの窓の外はベランダになっていて、そこに男（兄・利男）が立っている。

広がる夜景を眺めている。少し長いと感じてしまう間。

別の男（弟・直人）が入ってくる。仕事帰りだ。

奈美は直人に気が付く。

直人は利男がいないことに気が付く。

直人 兄ちゃんは。

奈美、首でベランダを示す。

奈美 見張ってる。

直人は窓の外、ベランダで「見張ってる」らしい利男を見る。

直人 何を。

奈美 私。

利男を見る。外を眺めている。首を傾げる。

直人 ……見張ってないよね。あれ。

奈美 見張ってる。私を。あそこから、飛び降りないように。

直人 死ぬよ。十階だし。ここ。

奈美 お兄ちゃんになんか用じやないの。

直人 親父から電話、いいよ急がないし。

奈美 いいよこっちは。たいしたことないから。

直人 （鼻で笑って）飛び降りるとか、まあまあいたしたことあるんだけど。

奈美、利男を見る。嫌そうなため息をつく。

直人、上着を脱ぎネクタイを外しながら。

直人 あれでも前は優等生だったんだけどなあ。
奈美 前って。
直人 会社辞める前まで。
奈美 そうだったっけ。忘れた。

奈美は、再び利男を見る。利男は、外を身を乗り出すようにじっと見ている。

直人 いいの、あれで。
奈美 よくないから、こんなふうになってんの。わかんない？
直人 八つ当たりすんなよ。
奈美 じゃどっか行ったら。
直人 ここ俺ん家なんだけど。
奈美 ……あ、そっか。
直人 あの、座っていいかな。
奈美 座ってていいかな。
直人 どうぞ。

直人、座る。

奈美 せつかくこんな立派なマンション買ったのに、お兄ちゃんに居着かれるなんてね。
彼女とかできたらどうするの。

直人 そのときは・・・しようがないじゃん。そのときまでに、ちゃんとしておいてもらって、ちゃんと出て行ってもらおうよ。

奈美 やっさし。

直人 そうか。

奈美 それとも、うれしい？

直人 は？

奈美 兄ちゃんの面倒をみる事ができることが。

直人 ……うれしい？

奈美 立派だねえ。

直人 立派か？

奈美 いい加減、自立したら。

直人 ほんとだよ。

奈美 直人君。

直人 俺？面倒見てんの俺なんだけど。

奈美 毎朝、起こしてもらってるってえ。

直人 朝弱いんだよ。(利男を見て) 余計こと言って。

奈美 ああなってる時点で、戦闘員としては失格だね。

直人 戦闘員で。

奈美 生きていけないでしょ。自力で。あれは。

直人 きっぴし。

奈美 同情してもしようがないじゃん。世の中直人君みたいな人稀だよ。いない。

直人 そりゃ身内だし。

奈美 あくく早く別れたい。

直人は奈美を見る。奈美も直人を。

奈美 なに。

直人 別に。

利男、不意に振り返る。二人の存在に気が付く。

利男、窓を開け、ベランダから部屋に入ってくる。

同時に、たくさんの車の走る音が飛び込んでくる。

利男 あれだな、向かいのマンションが無ければ、いい眺めだな。ここ。

直人 ほっとけ。

利男 贅沢だな。一人暮らしで。

直人 一人じゃないだろ。閉めろよ。

利男 俺？

直人 他に誰がいるんだよ。

利男 すげー雨ふりそうなんだけど。

直人 ならなおさら閉めろって。

利男 これだけ広いと、もてあますだろ。

と言いながら、利男、窓を閉める。

直人 いつまでも一人じゃないんだし。

奈美・利男 誰かいるの。

直人 いないよ。そのうちだよ。

利男 無計画だな。

直人 兄ちゃんに言われたくないよ。な、電話あったよ。

利男 誰から。

直人 親父。着拒にしてるだろ。

利男 なんの用。

直人 仕事みつかったかって。

利男 してんじゃん。

直人 してねーだろ。

利男 してることにしてんじゃん。ちがうの。

直人 してるよ。

利男 じゃ、してんじゃん。

直人 バイトだろ。そもそもしてねーし。

利男 お前まで親父みたいになんたって。仕事イコール社員みたいな感覚が化石なんだよ。

直人 いやいやならせめてバイトでもしてからいえよ。

奈美 無理だって。

利男 無理じゃねえし。

直人 じゃ、探せよ。親父だって兄ちゃんの面倒みきれねえんだし。俺頼みってどういう

状態だよ。

奈美 お医者さんが言ってるんだもんね。しばらくは無理だって。

直人 いやいやもう大丈夫だろ。

利男 奈美の前でやめようぜ。カッコ悪い。なあ。

奈美 なにしたの。あんなところで。一時間も。

直人 一時間もいたの。

奈美 馬鹿でしょ。

直人 いや、二人とも根性上げえよ。

利男 ・・・考えてたんだよ。奈美のこと。

奈美 私のこと。

利男 もしほんとに飛び降りたらって。そのあとのこと。

奈美 ふうん。

利男 (想像して) 下で、ぐちゃてなってる。

奈美 あ、直後のこと。

利男 こっから見た限り、形は意外にもそんなに壊れてないんだよなあ。でも、死んでる

ってのは、わかんだよ。

奈美 ・・・その話は、一体私をどこに連れていってくれるわけ。

利男 ベランダから、信号機が見えるだろ。その変な交差点の。

奈美・直人 ?・?・うん。

利男 ちゃんと繋がるから。馬鹿じゃないんだし。

奈美 何に繋がるかもわかんないけど。

利男 文句も言わず与えられた役割を果たしてんだよ。偉いよな。お前みたい。

直人 悪い、わかんない。

利男 そこに、なんと今日は人間の死体が転がってる。奈美の。でも、信号は動揺しない

ね。 粛々と赤白黄色を繰り返す。

奈美 ・・・赤、青、黄色ね。

利男 いろいろあるけどさ。やっぱ、かくあるべきだなと。

奈美 私が飛び降りても気にしないってこと。

利男 いやいやいやいや違うよ。

奈美 どう考えてもそういう話じゃない。ね。

利男 あそこでよく考えてさ。やっとなかったんだよ。俺らどうしたらいいか。

奈美 やっとなかった。

利男 一緒に、がんばろう。

奈美 え?そんな話まったくしてないけど。ただ別れてって言うてるだけじゃん。

利男 そんなの本心じゃないじゃん！
奈美 本心だよ！
直人 ……ちよっと、俺出るわ。
奈美 どこいくの。
利男 ちよ、ビール持ってきて。
直人 なんだだよ。兄ちゃん酒飲めないじゃん。
利男 今日位がんばるよ。
直人 俺知らないしそっちの事情。巻き込むなよ。
奈美 じゃ、私もビール。
直人 なんだだよ。
利男 一緒に飲むか。
直人 なんだだよ。なんでだよって、何回言わすんだよ。
奈美 そうしよ。
直人 話し合いは。
奈美 もういい。わけわんないし。
利男 ほんとだよ。
奈美 3人で飲もう。
直人 なんだだよ。もう。

と言いながら、直人、出て行く。
出て行くや否や、奈美が勢良く立ち上がる。利男も機敏に立ち上がる。

奈美 どうして止めるの。
利男 止めるだろふつう。だいたいここ俺の家じゃないし。資産価値下がるよ、人死んだら。泣くよあいつ。ローンだけ残って。
奈美 売らなかつたらいいでしょ。
利男 住めないだろ。そんな状態で。
奈美 住まなきゃいいじゃん。
利男 ……じゃ売らなきゃ。
奈美 売れないんですよ。人死んだら価値下がって。八方塞りだね。
利男 ……だから、飛び降りなかつたらいいんだよ。
奈美 だから、別れよっていつてんじゃん。
利男 だから、いやだつていつてんじゃん。結婚しよう。
奈美 ……残念すぎる。大逆転狙いのわけわかんないプロポーズしないで。
利男 座るから。座って言うから。
奈美 なら座って。
利男 お前が先座れよ。どうせ俺すわつたらまたびやーって走んだろ。
奈美 え、そもそもほんとに飛び降りるとでも思ってたんの。
利男 思っていないよ。
奈美 思っていないの。じゃなにこれ、この緊張感。

利男 そう機敏に動かれると、動かなきゃいけない感じになんだよ。
奈美 もういいじゃん。空しい感じになるだけだって。

直人、入ってくる。異様な状況に気が付くが、無視してテーブルにつく。

奈美 私のことほんと好きなの。

利男 好きにきまってるじゃん。

奈美 じゃ、なんで浮気したの。

利男 一つの話だよ。

奈美 2回も。

利男 お前も2回だろ。

奈美 うち、1回は利男が原因でしょ。

利男 でもな。

直人 どっちもどっちだよ。浮気すんなら働けよ。

利男 仕事辞める前だよ。

直人 知らねえし。

利男 タイミング悪いよ、お前。

直人 ビール取にいったただけだろ。ちょっとは計算して盛り上がってくれ。わかんだろそ
んくらい。

奈美 もういい。飲もう。

利男 飲も飲も。

直人 たのむから二人で飲んでてくれ。

利男 お前も、自分の分持ってきてんじゃん。

利男、ビール開けて飲む。

利男 苦っ。

奈美 乾杯は。

直人 乾杯。

奈美、直人とだけ乾杯をする。利男は続けて飲み、顔をしかめる。

奈美、飲みながら窓際へ。窓を開ける。大きな車の音。

利男 なんだこれ。

直人 無理して飲まなくていいって。

奈美 ほんと、向かいのマンション無かったらいい眺め。

直人 うるさいよ。

利男 あと、交差点の真上だから、窓あけると結構うるさいだろ。

直人 居候が文句言うな。

奈美 最近急に車増えたよね。

利男 そのこの道路が、高速とつながったんだよ。

奈美 へえ。残念な感じ。

直人 ほっとしてくれ！

利男 なんか危ないよな。事故って人死んでも下がるだろ。資産価値。

直人 心配すんな。まずないから。

利男 あの邪魔なマンションの隣にもまたマンションできんだよな。

直人 できるよ。

奈美 へえ。ますます夜景が残念になるね。

利男 熾烈な争いだよ。

直人 いいんだって。

利男 ちっさい長屋みたいなアパートつぶしてだよ。ひでえよなあ。

直人 それこの部屋関係ねえじゃん。

利男、ビールを飲む。顔をしかめる。

直人 不味いなら飲むな。

奈美 つていうか、いくらしたの、ここ。

直人 いくらでもいいだろ。普通だよ。

利男 さんにー。3200万。

直人 答えんな。

利男、ビールを飲む。顔をしかめる。

奈美 え！え？ほんと。(奈美、窓際から直人の元へ) つていうか、直人普通にすごいね。

直人、開けっ放しの窓を閉めに行く。

直人 働いてりやローンで買えるって。

二人 いやいやいやいや。

直人 仲良いじゃん。

奈美 え、給料って。

直人 いくらでもいいだろ。

利男 この年で800万位あるんだぜ、年収。

直人 だから、答えるなって。

奈美 ちよつとすごい。直人見直した。

利男、ビールを飲む。顔をしかめる。

直人 だから、無理して飲むなって。

奈美 私も住もうかな。ここに。

直人　なんでだよ。
利男　いいなそれ。
直人　いいことあるか！
奈美　あれ、もしかして私すっごいいいこと言ったんじゃない。
直人　別れるんじゃないの。
奈美　別れるよ。
直人　なら一緒に住めないだろ。
奈美　別問題だよそんなの。
直人　別じゃないだろ。
奈美　（利男と肩を組んで）友達。
直人　ややこしいよ。
奈美　（笑って）私らそんなややこしいのから。ね。
直人　なにが面白い。
奈美　来週から。いいかな。
直人　どこまで本気で言ってるの。
奈美　私いつもほんとのことしかいわないの知らない？
直人　冗談にしか思えない。
奈美　なんだか、面倒くさくなった。こいつが何考えてんのかとか、どうでもいいよ。そんなふわつとしたものは信用しない。
直人　なら余計一緒に住まなくていいじゃん。
奈美　無理無理無理無理。だってこいつ、別れてくれないもん。完璧な合意があるの、そこには私としては。だから捨てられない。
直人　理屈がわかんない。
奈美　一緒にこいつの面倒みようか。
直人　は？
奈美　一緒に飼ってみる？かわいそうだし。
利男直人　・・・ん？
奈美　楽しいって。絶対。
直人　はあ？
奈美　（利男に）それでいいよね。
直人　無茶苦茶だよ。
奈美　どうして怒るの。
利男　・・・やばい。
直人　どうした。
奈美　水飲む？汲んでくる。

奈美、部屋から出ていく。利男はついていこうとしてドアの側に座り込む。
直人は、その一連の動きをただ見ている。

利男　あいつは。

直人 いま兄ちゃんの水汲みに行ったじゃん。

利男 そう。俺さ・・・実は今日・・・俺今日な。

直人 なんだよ。

利男 ベランダ、見張ってたんだ。あいつ。

直人 知ってるよ。

利男 別れないと死ぬって言うから。

直人 そこまで粘れる兄ちゃんある意味凄いや。

利男 ほんとは。もう、いいんだけど。別れても。あそこまで言うんだし。

直人 一応わかかってんだ。

利男 なんだあいつ思ってることと真逆のことばつか言うんだろ。

直人 とことんポジティブだな。

利男 でも、言ったことは、守るんだよ。思ってることと真逆なのに。

直人 逆かどうかは知らないけどさ。

利男 有言実行だな。

直人 その有言実行いらんやいな。

利男 お前がつきあったら。あいつと。それならいいよ。

直人 なに言ってるんだよ。適当なこと言うな。

利男 全部うまくいきそうな気がする。

直人 おかしいだろ。ロジックぶっとびすぎててわけわかんないよ。

利男 だって、お前好きだろ。あいつ。

直人 ほんと殺すぞ。

利男 偉いな。お前は。

直人 寝ろ。

利男 困ってる人助けるの好きだもんな。

直人 知らない。

利男 一番わかりやすいのは、ほら、例えばその横断歩道で。

直人 そのわかりやすすぎる例えいらんやいな。

利男、缶を高く、最後の一滴まで飲み干す。

直人 もう飲むなって。

直人、缶を取り上げ確認する。空だ。

利男 飲んでやった。

直人 まじかよ。

利男 気持ちわるい。

直人 何考えてんだよ。

利男 ちよっと、風当たってくる。

直人 バカかお前。

利男、よろめきながら、ベランダへ。
窓を開ける。大きな車の音が飛び込んでくる。

直人 あれ。

直人、部屋を出る。
まもなく、戻ってきて、ベランダの兄の元へ。

直人 兄ちゃん、奈美ちゃん、いないんだけど。

ベランダの利男が突然体を外に乗り出す。

利男 うええええええええええっ！

直人 なにしてんだよ。

利男 すまん。寝る。

直人 もう、はやくね。

利男、部屋に戻る。直人、ついてくる。

直人 大丈夫か。

利男 明日も仕事？

直人 うん。

利男 ほんと、毎日お疲れさんだよな。

直人 そのくらい。

利男 ちゃんと起こしてやるから。

直人 うん。

利男 奈美ちゃん、いないって。

直人 うん。

利男、出ていく。

直人、利男を気遣いつつもベランダへ出て外を見る。探す。

早い速度で行き交う車が数台。

奈美、戻ってくる。

利男、それに気が付き、部屋に戻る。

奈美 お兄ちゃんは。

直人 寝た。

奈美 早いね。

直人 どこいったの。

奈美 ん。玄関の外。

直人 何で泣くの。

奈美 ん。

直人 泣いてただろ。

奈美 やっぱ、つきあっおつか。

直人 ……。

奈美 なんて何も言わないの。

直人 何言うの。

奈美 なんか。

直人 なんかって。

奈美 うくん。

直人、窓を閉めに行く。閉めて戻って座る。

直人 ……今日、やっちゃまったんだ。仕事で。

奈美 なにを。

直人 失敗っていうか、ズルっていうか、犯罪っていうか。

奈美 スリリングな仕事だね。

直人、奈美の顔を見る。突然笑い出す。

直人 スリリングだよなあ。

奈美 なにしたの。

直人、立ち上がり、奈美のほうへ。奈美の肩に手を置く。

直人 ……くだらない愚痴聞いてくれてありがと。

奈美 え。

直人 (奈美から離れて) 切羽詰まってやっただけ。つまんないことだよ。

奈美 (笑って) 超短い愚痴。なに。

直人 ノルマ未達だったから。契約書偽造したんだ、誤魔化すのに。

奈美 犯罪じゃん。

直人 その場のしのぎだし。明日キャンセルになったことにするんだ。いろいろギリギリなんだよ。

奈美 お疲れさんだね。

直人 兄ちゃんみたいになったらいけないしさすがに崩壊するよ。

奈美 直人君は大丈夫じゃない上手だし。

直人 何が。

奈美、直人に近寄る。秘め事のように話し出す。

奈美 私もね、犯罪、あるんだよ。

直人 まじで。

奈美 小学生のころ、万引きしたことがある。

直人 そうなの。

奈美 たばこ。

直人 えええ！悪い！

奈美 成績良くて、真面目な子だった。小学児童の奈美ちゃんは。可愛かったし。

直人 自分で言うな。

奈美 親も、たいそうかわいがってくれました。かわいそうなのは奈美ちゃんの妹です。なにせ私がすべての良い所を手に入れて、すくすくと育ってるんだもん。でも、どうしてあげることもできません。なにせ小学生ですから。

直人 しょうがないですね。

奈美 ある日奈美ちゃんは、ヒトシ君っていう不良の男子児童に恋に落ちました。ヒトシ君はお父さんが居なくて、お母さんは水商売で、毎夜毎夜寂しく過ごしていました。ヒトシ君は、お母さんを少しでも心配させようと、一生懸命悪の限りを尽くしていました。

奈美 ちゃんは、なんだか自分の円満家庭が申し訳なくって、自分の成績とか明るい性格とか可愛さとか申し訳なくって。

直人 言うね。

奈美 ヒトシ君の気を少しでも引きたくて、両親の私への愛情を妹に分けてあげたくて、駄菓子屋で、なぜだかタバコが売ってて、レジの前、おばちゃんはいない、手と足を音が鳴るくらい震わせながらタバコをポケットに忍ばせた。

直人 スリリング。

奈美 あっという間に見つかった。怖くて、思いっきり走って逃げた。気がつけば山の中。でもそのおばちゃん、なんと山の中まで追いかけてきて、御用。ヒトシ君はもう何千円分とやってるのに、私はその1回で。

直人 そういふもんだね。

奈美 初めて見た。お父さん泣いているところ。びっくりしたんだね。お母さんも、私も。

事情を知らないはずの妹もつられて。一家総動員で号泣。

直人 で？

奈美 それから、わかんなくなった。

直人 なに。

奈美 自分の痛みが。人の痛みしかわかんない。

直人 何様だよ。

奈美 欠落してるんだね。部品が。

直人 押んでいいかな？

奈美 直人君もだよ。

直人 俺？

奈美、ベランダに出る。車の音、激しい。直人、ついていく。

奈美 すごいね、夜景。

直人 向かいのマンション邪魔だけど。

奈美 憎たらしいね。

直人 さらに、あれ、うちの競合の物件という曰く付き。

奈美 へえ、ますますむかつく。

直人 さらにさらに、ここはうちの物件。あれのせいでこのマンション売れなくて、自分で買ったんだ。

奈美 そうなの。

直人 自爆だよ。

奈美 ふうん。

直人 こんど、うちの物件があマンションの隣に建つんだ。

直人、自慢げに指をさし。

直人 あのちっちゃいアパートのところ。

奈美 へえ。

直人 仕返しみたいじゃない。

奈美 せこいね。発想が。

直人 自爆してんだよこっちは。

奈美 なんかセレブはセレブで大変だね。

直人 セレブじゃねえし。

奈美 年金もらえる時点でセレブなんだって。

直人 基準低っ。

直人、向かいのマンションに利男を見つける。

直人 あれ？

奈美 なに。

直人 あれ、利男じゃない？

奈美 ん？

直人 向かいのマンション。あそこ。

奈美 ほんとだ。

直人、奈美、身を乗り出す。

奈美 ……タバコ吸ってる。

直人 ダメだろあんなところで。

奈美 すっごい笑顔。

直人 何考えてんだ。

奈美、部屋に戻る。直人は暫く利男をみている。

奈美は、帰り支度を始める。直人が部屋に戻ってくる。

直人 どっかいった。あいつ。

奈美 ふうん。

直人、奈美の帰り支度を気にする。

直人 なあ。

奈美 ん。

直人 一緒に住む？

奈美 ……。

直人 一緒に住もつか。

奈美 ……。

直人 三人で。

奈美 ……。

直人 何か言えよ。

奈美 帰る。

直人 帰るの。

奈美 うん。

直人 どうして。

奈美 合意したから。別れること。

直人 いまの？そうなの。

奈美 目の前を出ていかれるのが嫌なだけじゃん。

直人 いや俺全然わかんないけど。

奈美 目の前で泣かれるのが嫌なだけじゃん。ほんと最低。

直人 ……なあ。

奈美 ん。

直人 いいの。これで。

奈美 何が。ばつくりしすぎて、答えられない。思ってるの違ったらいけないし。

直人 ……ごめん、俺も何聞いたかわからなくなった。

奈美 なにそれ。

直人 また。こんど。聞く。

奈美 だね。整理してから。

直人 うん。

奈美 じゃ。

奈美、出て行く。直人もついていく。玄関まで見送り、戻ってくる。

手にはもう一本ビールを持っている。玄関の方を向き、独り言。

直人 え、もう、こないってこと。

直人、ベランダへ。利男は居ない。

直人 どこいったんだよ。

テーブルに座る。ビールを開ける。飲む。

直人 終わった。

再び飲む。

缶をいったん置いて、自分の手を見る。

直人 触った。奈美ちゃんに。

溢れる笑顔。拳骨に喜びを込めて膝を叩く。

直人 ああああもうこないの。

悶絶。

不意に、大きなクラクション。

立ち上がりベランダへ。

直人 信号守れよ。ヒステリー起こすなって。

激しく行き交う車の音。

時折、スリップ音すら混じる。

雨が降り始めているようだ。直人、手のひらを空にかざしてみる。

直人 血の気が多い道だよ。

直人、部屋に戻る。窓を閉める。

ビールを飲む。

外を気にしながら飲む。

一気に飲む。

利男が戻ってくる。

利男 ただいま！

直人 ……おかえり。

利男　なんか。逆だな。いつもと。

直人　ほんとだな。

利男　妙な感じ。

直人　新鮮だな。

利男　奈美とエレベーターで出くわしたよ。

直人　なんで連れて帰ってこないの。

利男　もういいんじゃないね。

直人　いつか。

利男　むかつくから、タバコ吸ってやった。向かいのマンションで。

直人　見たよ。なににむかつくんだよ。

利男　でも、あのマンションからも、邪魔な感じだったよ。こっちのマンション。よかつたな。

直人　どっちでもいいよ

利男　ざまあみろって感じ。

直人　気持ち悪いの大丈夫？

利男　むしろ気持ちいいよ。もっかい飲もうか。

直人　は？やめとけって。

利男、出て行く。直人、呆れ顔で利男を見送る。

閉めた窓を超えて、薄く吹かすようなエンジン音。クラクション。

利男、ビールを持って入ってくる。

直人　また吐くだろ。

利男　お前に彼女取られるんだぜ。飲まないとやってらんないよ。

直人　んなわけないだろ。

利男　あるって。

直人　ないって。

利男　お前の勝ちだよ。

直人　なんでだよ。

利男　なんとなく。

直人　なんでなんでも勝ち負けなんだよ。

利男　そりゃそうだろ。

直人　絶対ないし。

利男　じゃ、聞いてこようか。あいつに。直に。

利男、勢いに任せて出て行こうとする。直人、引き止める。

直人　どっちもアウトだって。

利男　まじかあ。

利男、出ていくのをやめて、ビールを飲み始める。それを見て、直人も飲み始める。

二人、ビールを飲む。一気に飲む。

直人が先に飲み切り、利男の飲む様を見ている。

直人 無理すんなって。

突然、車の大きなブレーキ音。続いて何かに衝突する大きな音が響く。二人、慌ててベランダへ。

直人 ほら。

構わず続く、車の行き交う音。

溶暗

2場

車の行き交う音が徐々に遠ざかり、明かりが入る。
場面は変わって、料亭とはお世辞にも呼べない、ちよつとした日本料理レストランの個室。

テーブルを挟んでスーツ姿の男（大西）と、女子高生風の女（高橋）が座り、盛り上げて話をしている。

大西 卵を買いにいったんだ。

高橋 たまご？

大西 そ、卵。

高橋 それで。

大西 そのまま。

高橋 ええ！？

大西 注文は？食後のデザート。

高橋 それより、卵買いに行つてそのままどらなかつたんですか。

大西 おかしいよな。普通女の人だよそういうことすの。聞いたことあるもん。サラダ油を買いに行くつて出て行つたまま、戻つてこなくなつた奥さんの話とか読んだことある。

高橋 ……へえ知らなかつた。…奥さんがいたなんて。

大西 あれ。言つてなかつたつけ。

高橋 聞いてません。

大西 ちよつとまつて。なんだか騙してたみたいじゃない。何年も前だよ。別れたの。

高橋 未練は。

大西 未練。

高橋 あるんだ。

大西 ないよ。

高橋 いま、未練つていう前に0.3秒の間があつた。

大西 ん？

高橋 あるつてことなんです。それは。

大西 ちがうつて。ほら、俺の年にもなるとき、遅いんだよ。伝達の速度が。聞いた声が脳に届くのも、脳から口に話せつていう指令も。

高橋 え！そんなんですか。

大西 そう。もうそんなこと心配しなくていいのに。

高橋 どうして別れたんですか。

大西 忘れた。

高橋 嘘。

大西 ほんと。いろいろあつたんだよ、きつと。

高橋 信じていいんですか。未練は無いつて。

大西 もちろん。なに、もしあつたらちよつと嫉妬する。

高橋 はい。

大西 もうかわいいな。梓ちゃん。
高橋 やめてくださいよ。

大西 ないよ。未練だなんて。梓ちゃんだから。ほんと安心していいんだよ。

高橋は、携帯で時間を確認する。

大西 どうしたの。

高橋 そろそろ。

大西 え、もう。(大西も時間を確認して)

高橋 ありがとうございます。楽しかったです。

大西 あの・・・もうちよつとだけ。駄目かな。

高橋 勉強しないといけないから。

大西 そうだよな。

高橋 でも、いいですよ。少しなら。

大西 あの、ちゃんと出すから。ちよつとまって。(鞆から財布を探す)

高橋 いいです後でも。信用していますから。

大西 あ、そう。

大西は、カバンをもったまま、何か考えている。

高橋 どうしたんですか。

大西 (思い切って) あの、プレゼントがあるんだ。ほら、誕生日でしょ。来週。

高橋 ああ、はい。

大西 誰と？一緒に。誕生日。

高橋 ……え？

大西 (焦る) あ、ごめん。なにも。

高橋 独りですよ。独りっていうか、家族と。

大西 (安心して) あそうかそうだよな。

高橋 なんですか。

大西 あの。いや、色々考えたんだよ。指輪とかって、ちよつとイミ深すぎるし、ピアスは、まだ、穴あれでしょ。だからネックレスかなとか、i padかなとか。

高橋 i padですか！

大西 i padがよかった？

高橋 ……いえ。なんですか？

大西 色々考えて、考えすぎて、一番いけない選択をしてしまうことってあるじゃん。

高橋 気にしないでくださいよ。何でもうれいですよ。

大西 ほんとに。

高橋 はい。

大西 ……じゃ。どうぞ。これ。

大西は、「中年が考えるかわいい包装」に包まれた箱を差し出す。

高橋 ありがとうございます！開けていいですか。

大西 今ここで？あの、いいよ。

高橋が包みを開けると、透明な小さな瓶が出てくる。

瓶の中には、茶色いどろどろした得体の知れない液体。

高橋・・・なんですか。これ。

大西 結局チョコレート。

高橋 チョコレートなんですかこれ？

大西 うん。

高橋 あの、誕生日なんで、バレンタインと違いますけど。男女も逆だし。

大西 あ。

高橋 もう、なんか、大西さんらしい。

大西 作ったんだ。

高橋 作ったんですか！？

大西 なに。おかしい。よくない。

高橋 いえ。ありがとうございます。

大西 ごめんな、色々混ぜたら上手く固まらなくて。

高橋・・・うれしいです。

大西 うそ、そんな、奇妙なやつ。

高橋 そんなの関係ないですよ！気持ちですから。

大西 気持ち。

高橋 はい。私のために一生懸命作ってくださいました気持ちがいいです。

大西 梓ちゃん・・・あのさ。

大西、突然高橋の前に立ち。

高橋 なんですか。

大西 俺こんなだけどさ。実は。ちゃんと、好きなんだ。ほんとは。ほんとに。

高橋・・・知ってますよ。

大西 そうじゃなくて。ほんとに。ちゃんとしたいって。

高橋 ちゃんとしたい。

大西 きちんと、したい。

高橋 はい？

大西 ちがうちがう。したいってあれだよ。やらしいのじゃなくて。これだけ年はなれて

て、こんな関係で、あれだけど。好きなんだ。だから。こういうのじゃなく。ちゃんと。

高橋・・・私もですよ。

大西 え。

高橋 ちゃんとしたいです。好きですから。

大西 ほんとに！？（猛烈にうれしく、涙が出そうになる）・・・ありがとう。

高橋 人として・・・好きです。

大西 ・・・ありがとう。

高橋 男の人としてではなく。

大西 ・・・え。

高橋 女の子としてですよ。好きっていうの。私のこと。

大西 あ、うん。

高橋 人としてではなく。

大西 は？

高橋 逆ですね。好きになり方が。

大西 ちがうよ。

高橋 ちがわないです。こういう女の子を、人としては好きにはならないですよ普通。

大西 違う。人としても、好きだよ。

高橋 嘘。いま0・3秒の。

大西 嘘じゃない！

高橋 ・・・ほんとどうもありがとうございます。

大西 だからちゃんとききたい。年齢差すごいあるのわかってるし、奇妙に見えるかもしれない。ちよっとおじさん臭い発言とか臭いとか行動とか臭いとか、多少我慢させようとする。自信がある。梓ちゃんのために、何かすることを僕が、凄くうれしく感じる。っていう確信があるんだ。だから、こんなじゃなく、ちゃんとした・・・と、僕は思ってる。もちろん梓ちゃんもそれを望んでくれるなら、の話なんだけど。

高橋 関係ないじゃないですか。私が望む望まないと大西さんがどう思うかは。

大西 うん。僕は、思ってる。そう。

高橋 だったら・・・ちゃんと教えてください。

大西 ん。

高橋 どうして、家を出たんですか。

大西 どうしてって。

高橋 それを知らないと先に進めません。ちゃんとしたいのには、できません。

大西 あのえっと。えっとね。

高橋 嘘はつかないでくださいね。

大西 もちろん・・・すごくいい時期だったんだ。仕事も順調で。もともと彼女のアパートに転がり込んで始めた暮らしたから、そろそろ家でも買おうかって話になって。そのときにさ。思ったんだ。あ、俺今生で最高の瞬間だって。

高橋 なんですかそれ。

大西 体も丈夫で、頭も冴えてて、何をしてもうまくいく自信があって、失敗する気がしない。愛する妻もいて。彼女もすごく幸せそう。そのとき、今が、俺という人間の人間としての最大値だって確信したんだ。ほらボールを投げたときの、放物線の山型の一

番高いところ。今までの俺の集大成だよ。それが今だって・・・そう思ったら、仕事の帰り電車の中。急に涙があふれてきたんだ。ぼろぼろぼろぼろ。

高橋 どうして。

大西 わけがわからない。とにかく寂しかった記憶がある。家に帰ると、妻がおかえりつて。ここにこしてるんだ。無邪気に家のパンフレットを見せにきて。あれがいいだのこれは譲れないだの。あんまり平和でほっとしてき。なんだかおかしくなって。さっきのはなんだったんだろうって・・・でも次の日の帰り道、また同じ寂しさが襲ってきた。それが毎日続いて。最初は仕事のせいだと思った。今の俺ならもつとすごいことできるかもしれないのにつて。よし転職しようって思った。でもいい出せなくて。

高橋 言えばいいじゃないですか。

大西 なんの根拠もないもん。うまくいく保障なんて全くないし、失敗したら、家も買えない。でもそうすると今度は、妻のせいにするんだ。わけのわからない寂しさの原因を。

高橋 ふうん。

大西 そのまま、ある日ふと、ほんとにふと、晩御飯の材料に、卵がなくて・・・何を作ろうとしてたんだろ。とにかく卵がないからっていうから。それを買いに出かけたんだと思うんだけど、そのまま帰らなかった。そのまま仕事もやめて。

高橋 ええ?! それでそれきりなんですか。

大西 一ヶ月位してからさ、離婚届を送ったんだ。少し期待があったんだ。あつちは、ほらこつちの住所も知らないから。住所を書いて送ったんだ。でも、なんの便りもなく、いつの間にか受理されてた。

高橋 それきり、そのままですか。

大西 うん。そんな。感じ。

高橋 後悔してますか。

大西 (少し考えて) ううん・・・あの放物線の一番高いところの時みたいなの、満ちたエネルギーは二度と僕の体に宿らないし、家族もない。でも、後悔はしてない。

高橋 どうしてですか。

大西 だって、結果的に、こうして、梓ちゃんと、会えたし。

高橋 どうして、私とつきあいたいんですか。

大西 好きだから。

高橋 馬鹿ですか。女子高生ですよ。

大西・・・でも、僕は、今、そう思う。から。たまたまなく、それを、望んでる。だから。

高橋 ちゃんと付き合うつて。なんですか。

大西 え。

高橋 定義。

大西 定義?・・・えっと、ほら、週末に会って一緒に遊びに行くとか。

高橋 今もじゃないですか。

大西 ただ会うんじゃないかって、週末会うのに、それが普通で。約束とか必要なくて。会わない週末が普通でなくて感覚を、お互い持つて。さりげない、無理のないところで、お互いを尊重して大切に思ってるとか。そんな関係。みたいな。

高橋 素敵ですね。それって。

大西 うん。

高橋 ……いいですよ。

大西 いいの？ほんとに。

高橋 もちろん。

大西 あの、えつと、あ。ありがとうございます。ほんとにありがとうございます。

高橋 私でよければ。

大西 もちろん。梓ちゃんじゃなきゃ駄目なんだよ。

高橋 ありがとうございます。

大西 え。いや。こちらこそ。ほんとううれしい。よろしく。これからもよろしく。

高橋 幾らですか。

大西 え。

高橋 援助。

大西 ……援助。

高橋 はい。

大西 ああ。えつと。そうじゃくて。ちゃんとした、付き合いをしたいなって。

高橋 ちゃんとしましょう。そこは。

大西 そうだね。

高橋 おかしいですか。

大西 おかしくはないよ。現在の、僕と、梓ちゃんの関係においては。でも、さっき僕が言ったのは、それをそうでなくすことができないかなってことで。

高橋 お金がないんですか。

大西 ううん。ある！いやあるってほどあるわけじゃないけど、そのためのお金はある。

高橋 だったら。

大西 いや。あの。

高橋 お金はあるけど、出せないってことですか。

大西 いや、出せる出せるよ。

高橋 なんですか、じゃ。

大西 いや。うん。そうだね。…よし出そう！幾らかな。それって。

高橋 それこそ気持ちですよ。

大西 でもその気持ちってのが難しいよね。さっきのチョコとはちよこつと違うもんね。

高橋 違いますね。

大西 ……。

高橋 困りますよね。気持ちっていわれても。…意地悪なことをいってごめんなさい。

大西 いや。

高橋 ちゃんとききますよ。私もそうしたいって思っていましたから。

大西 え？

高橋 実は、彼氏がいるんです。私。同じ学校の同級生で。

大西 ……そうかあ。

高橋 別れますね。

大西 え。どうして。

高橋 ちゃんと付き合うならそれが普通ですよ。そういうことを言っているんですよ。
大西 あ、うん。

高橋 (真剣に) だから、ちゃんとお金はください。

大西 ……え。

高橋 だって、やっぱりファンタジーですよ。私はまだ、バツいちでもなければ、就職もしたことがない女子高生で、変な臭いもしないし、腰も痛くないし意味もなく冷えない。自分が下り坂だなんてこれっぽっちも思っていないです。色々毎日不安は不安だけど、まだこの先に何かの可能性を夢見てもいい年です。それにこの先十年くらいは、どんどん綺麗になっていくんですよ。27歳の女の人って、凄くきれいじゃないですか。私十年後でもあんなに綺麗でいられるんです。これから先十年、私の価値は上がり続けるんです。だからやっぱり Pay に値するんだと思うんです。

大西 Pay?

高橋 ほら、ケーブルテレビとかでもあるじゃないですか。追加でお金を払うチャンネルが。特別面白いですその番組は。だから、わざわざ別にお金を払って観るんですよ。

大西 うん。

高橋 そういう存在にしてください。すごく喜びますから。私。

大西 うん?

高橋 だからもし私が、大西さんのこと男の人としても好きだとして、お互い求め合っ
て付き合うとしてもですよ。それでも、必要だと思っ
て支払いは。どうですか。

大西 うん。そうだ、その通りだ!

高橋 それに、援助がないと、アルバイトします。お金ないですから。会う時間がないです。

大西 それは困る。

高橋 コンビニとかマクドナルドとかで、時給 850 円で土曜日と日曜日、丸一日台無しにして働くんです。だって、お金必要ですもん。友達と遊びに行ったりして互角に楽しみたい。互角にラインしたり互角にスタバしたり互角にカラオケしたりしたい。互角にかわいい服も着ないといけない。そんな中でも、宿題とか部活とかこなさないとけない。いい大学にも入らないといけない。それなのに時給 850 円じゃ。こんなに少ない貴重な時間を売るのに割りに合わない。女子高生の一時間はそんなに安いですか。

大西 安くない!

高橋 だから、おかしなこといつてるようですが、全うなんです。私。

大西 ちっともおかしくない。出す。出させて。梓ちゃんの現在と未来のために。

高橋 ありがとうございます。そりゃある程度ないと厳しいですけどほんと気持ちいいんですよ。だって、私は大西さんと、ちゃんと付き合っ
てますから。仕事でなく。人と人として、男の人と女の人として。だから、お金はあくまで気持ちなんです。

大西 気持ちだよ。

高橋 はい。

大西 よし。気持ちって。単刀直入にズバツと、このくらいかな。(手で5万を示す)

高橋 え?

大西 ……月。

高橋 あ、月ですか。

大西 いやまちがえた、・・・週！
高橋 週ですか！いいんですか。
大西 ……いいよ！
高橋 じゃ、デートのとき、これから少し出しますよ。
大西 え、いいってそんなの。
高橋 でも、大西さんにお金がないからって会えなかったら、やっぱり寂しいですから。
カラオケとかマックとかならですけど、いいですか。そういうところでも。
大西 梓ちゃん。ありがとう。大丈夫。がんばるよ。俺。
高橋 お母さんにだけ、言いますね。大西さんのこと。
大西 ……え！
高橋 困る？
大西 困らないけど。お母さん。大丈夫かな。
高橋 だって、普通の彼氏ですよ。
大西 まあうん。そうだけど。
高橋 でもお姉ちゃんがなあ。
大西 反対する？
高橋 わからないですけど。ちよつと、グレてて。ドラッグとかもやってて。
大西 えちよつとというか。けっこうだね。
高橋 万引きとかも常習だし。
大西 えええ！
高橋 でも、安心して欲しいですから。しっかり話をして理解してもらいます。
大西 あれあの、全部話すの。
高橋 普通に、彼氏として、ですよ。だって、普通に彼氏ですよ。
大西 うん。
高橋 (よく考えて)もしその倍出せるなら結婚します。
大西 え。なに。結婚？
高橋 その可能性がないわけじゃないじゃないですか。だから、もしもの話として。
大西 あうん。
高橋 今の大西さんには無理だったことも知ってますけど、できるなら、そうしたいな。
大西 ええ？
高橋 うち、両親すごく仲悪いから、紹介するときにはちよつとややこしいですけど。
大西 あそう。
高橋 さっさと別れたらいいのに。大西さんみたいに。
大西 あの、梓ちゃん。どこまで本気なのか。
高橋 冗談だと思ってるんですか。
大西 正直、冗談とか、なんかそんなのかもしれないって・・・思う。
高橋 本気です。
大西 そう。
高橋 それで高校やめてサークルもやめて、友達づきあいもやめて、親の変な期待に応えるのもやめて。そういうのも、素敵だあって。だから、思い切って一生かかってくれる

んだったら、よろこんで売りますよ。私。

大西 梓ちゃん、売りますよって。それはいくらなんでも。むちゃくちゃだよ。

高橋 もともとがむちゃくちゃじゃないですか。ちゃんと付き合うとかいいながら、払ってって言ったら、お金払うんでしょ。さっき払うって言いましたよね。

大西 え・・・あ。うん、言った。

高橋 でもお金ないですよねそんなに。

大西 今のところ。ない。

高橋 だからいいです。私を本当に好きなんだったら働いてそのうち買ってください。

大西 あのさ。真面目に。

高橋 だから本気ですっていつてるじゃないですか！しつこいな！

大西 わかった。ごめん。

高橋 ・・・・ごめんなさい。

大西 いや、いいよ。

高橋、チョコレートの瓶を見ている。

高橋 ・・・・ほんとは、iPadがほしかったです。

大西 うん、わかってる。

高橋 でも、これも、ほんと、うれしいんですよ。

大西 ありがと。

高橋 味見しました？

大西 チョコっぽかったよ。

高橋 材料はなんですか。

大西 チョコレートと、ワインと、あと、ブランデーとか。けっこういいやつなんだよ。

高橋 それに牛乳と、えっとセンビキヤの100%のグレープジュース。

高橋 大丈夫そうですね。ひとつひとつの素材は。飲んでも。

大西 いいよ。飾りだから。

高橋 飾るんですかこれ！

大西 あいや、飲めないから結果的にそうするしかないかなって。

高橋 飲みますよ。せっかく作ってくれたんですから。

大西 え、今。あ。

大西の制止も間に合わず、高橋、飲み始める。とても苦しそう。

大西 いいってちよっと。

高橋 ・・・・ごちそうさまです。

大西 どう。

高橋 ものすごくまずいです！

大西 ごめん。

高橋 これ作ってて。途中でおかしいって思わなかったんですか。

大西 思ったんだけど。うまく働かなくて。頭が。
高橋 (思わず笑いだす) 凄いですね。こんなの、普通渡そうって思わないですよね。
大西 馬鹿だよな。
高橋 ほんと。ありがとうございます。うれしいです。
大西 うそ。
高橋 ほんとです。こんなにまずいんですよこれ！

高橋は猛烈に感動している。大西は、わけがわからない。

高橋 なんだか、それがうれしいんです。
大西 ?ありがとうございます。

高橋 ごめんなさい。

大西 なに。

高橋 お姉ちゃん、ドラッグとか、やってないです。

大西 え!?!? あ、そう。

高橋 万引きも、たぶん一回だけ。一生で。

大西 あのいいよ別に。いいよっても変だけど。

高橋 あと。両親も仲、いいです。気持ち悪いくらい。うち。

大西 そうなんだ。

高橋 とても温かい家族なんです。心から大切にしたいって思う。

大西 ……うん。

高橋 大西さん、ちゃんと奥さんに連絡してくださいね。そのままってのはよくないです。
す。……ちゃんとした彼女ができたんですから。報告しておいてください。

大西 ……え。

高橋 じゃ、どうぞこれから、よろしくお願いします。(手を差し出す)

大西 (手を握る) こちらこそ。

高橋 ……日割りでいいですよ。

大西 え。

高橋 今月分は。もう一週間過ぎますから。

大西 あ、ありがとうございます。

高橋 今日のは別ですけど。

大西、カバンから財布を捜す。

高橋 途中でやめるときは、月末の十日前までには言ってください。

大西 (財布を探す手を止め、ちゃんと) そんなふうにはならない。

高橋 そうですか。

大西、「今日の分」を高橋に渡そうとする。高橋は、すぐには受け取らない。

高橋 受け取っていいんですね。大西さんはそれでいいんですね。

大西は、考える。そして、頷く。

高橋 じゃ、ちゃんともらいます。

高橋、受け取ろうと手を差し出す。大西は、渡すことに若干迷う。高橋は大西が迷っていることに気がつく。大西、決心して渡す。高橋、決心して受け取る。

高橋 ありがとうございます。

高橋、お金を丁寧に仕舞う。そして、ちゃんと大西に向かい合い……

高橋 私、高校生じゃないです。

大西 ……え、え？

高橋 もうちよつとだけ、上です。

大西 ……へえ。

高橋 割り引きますか。

大西 いや。

高橋 つまんないことですが、聞いていいですか。

大西 なに。

高橋 卵、買ったんですか。そのとき。

大西 ……買ったよ。

高橋 どうしたんですか、それ。

大西 家の前においといた。

高橋 ……律儀ですね。

大西 卵ないと、困るかなって。晩御飯。

高橋 困りますね。

大西 うん。

高橋 そうなんですか。……帰ります。

大西 え、あ送ってくよ。

高橋 いいです。……じゃ。

大西 待って。

高橋 なんですか。

大西 いま、かけるから。電話。ここで。

高橋 どっちでもいいです。

大西 かける。

大西、携帯を取り出す。

高橋が見る中、精一杯の覚悟で電話をかける。

ところが、なかなか、出ない。が、ようやく出た。

大西　・・・あつ、あの。俺だけど。・・・ごめあつ！。

電話は切られたようだ。そのまま溶暗。

一台、また一台と車の走るタイヤ音。数が増えながら、徐々に近づいてくる。

3場

明かりが入ると場面が変わって、木下(女)の家。
築30年くらい古いアパートの一室。質素な部屋。女性の部屋らしさはもちろん、生活感すら希薄。どことなく神妙な面持ちの祐介と、落ち着いた様子の木下が向かい合って座っている。そのまま、しばらく、間。

祐介 ……駄目だろ。

木下 どうして？

祐介 どうしてって……。

木下 何？

祐介 ……。

木下 飲まないの？(コーヒーがずっとそのままだったのだ。)

祐介 え。ああ。

祐介、コーヒーを手にする。温かい。

なんとなくゆっくりと、あたりを見渡す。

木下 どう？

祐介 ん。

木下 懐かしい？(部屋)

祐介 ああ。

少し緊張が解れる。飲む。

祐介 苦いっ！

木下 苦かった？

祐介 あ。でも、うまい。

木下 なにそれ。

祐介 懐かしい。木下の作ったコーヒー。

木下 ふつうのインスタントなんだけど。

祐介 自分で作るとうまいかないんだ。濃さが。

木下 ありがと！

祐介 えっ

木下 誉めてくれてるんですよ。

祐介 え……そう！

木下 濃さの調節がうまいって。

祐介 ……そう。

木下 不思議ね。いつも過ごしている家なのに、祐介がいるだけで、ずっと昔に逆戻りしたみたい。

祐介 ……そうか？

木下 うん。

祐介 ……。

木下、コーヒーを飲む。祐介、それを見る。

祐介 どうして？

木下 なに？

祐介 どうして、ふたりだけなの？

木下 ひとりしか誘ってないから。

祐介 同窓会って聞いたんだけど。

木下 二人でも立派な同窓会よ。

祐介 ……。

木下 実はね。

祐介 なに？

木下 嘘なの。

祐介 わかってるよ。

木下 怒った。

祐介 怒ってないけど。

木下 いや？

祐介 嫌とかじゃなくて。

木下 だめ？

祐介 駄目とかじゃなくて。

木下 思っていることをそのまま言っただけよ。

祐介 ……わかった。

木下 いいの？

祐介 そうじゃない。

木下 いいけど。返事急がないし。

祐介 お前なあ。

木下 なに？急いで欲しいの？

祐介 なんでこんな嘘ついたの？

木下 ふつうに誘っても、祐介こないし。

祐介 そんなことないよ。

木下 そんなことあるよ。

祐介 そんなことないって。

木下 そんなことなくても、色々聞いてきてめんどうくさい。

祐介 そんなことない。

木下 そんなことないか。

祐介 え？

木下 だって来たでしょ。実際。

祐介 そりゃ。

木下 仕方がないから？

祐介 そういうわけじゃないけど。

木下 ……ありがとう。

祐介 ？

木下 同窓会嘘だって、気がつかなかったの？

祐介 ふつう気がつかないよ。疑わないし

木下 嘘ばっか。気が付かないわけないって。

祐介 ほんとに。気がついてたらさ、

木下 こなかった？

祐介 ……わからないよ。そうなってみないと。

木下 想像してみて。

祐介 どうして今になって急に。

木下 想像してくれないの？

祐介 質問に答えろって。

木下 久しぶりに祐介に会いたくなったの。どう？

祐介 ……どう？

木下 それを聞いた感想。

祐介 わからない。

木下 それもわからないの。

祐介 わけがわからないよ。どうして今になって急にこんな風に。

木下 ほら。

祐介 何？

木下 どうしてって。

祐介 何？

木下 聞く。

祐介 そりゃ、聞くよ。

木下 理由なんてないよ。ふと昔を思いだして、会ってみたくあることってあるじゃない。

だから、ふと誘ってみて、ふと会ってみた。

祐介 ……。

木下 (誇らしげに) それだけ。ただ、それをやってのけただけ。

祐介 ……ふうん。

木下 ふうん、だって。

祐介 何？

木下 ……別に。

木下、コーヒーを飲む。続いて祐介も。

ふいに携帯のバイブ音。木下の携帯だ。

木下、携帯をしばらく眺める。手に取る。出る。切る。

祐介は一連の行動をそれとなく見ている。

祐介 ひとり？
木下 何が？
祐介 (木下が・・・というジェスチャー)
木下 他に誰がいる？
祐介 ん？・・・俺。
木下 じゃあふたり。
祐介 そうじゃなくて。1人なの？
木下 だから、何が？
祐介 だから・・・。(木下が・・・というジェスチャー)
木下 だから他に誰がいる？
祐介 だから・・・俺。
木下 じゃあふたりであってるんじゃないの。

木下、笑う。祐介、苦笑。

木下 何？彼氏？いないよ。おめでとう。よかったね。
祐介 結婚したって聞いたけど。
木下 そんなこともあったなあ。
祐介 ・・・・。
木下 したよ。
祐介 ふうん。
木下 今のふうんは、どんな意味。
祐介 え。
木下 でもね。
祐介 何？
木下 別れたの。
祐介 えっ？
木下 出ていった。
祐介 ほんとに。
木下 うん。買い物に行つて。そのまま帰って来ない。
祐介 どうして？
木下 わからない。
祐介 わからない？そんなので、いいの？
木下 いいもなにも、いないんだもん。
祐介 ・・・・そう。
木下 そう！
祐介 ・・・・ふうん。

祐介、コーヒーを飲む木下、見る。

祐介 十年くらい経つか。
木下 もっとでしょ。
祐介 まだ住んでんだここ。
木下 マンションでも買おうとしてたんだけどねえ。
祐介 ふうん。
木下 全盛期は。
祐介 うん……。今なにしてるの。
木下 なにしてるのって。
祐介 いや仕事、とか。
木下 ああ。スーパーのパート。
祐介 へえ。どこの。
木下 内緒。
祐介 いいじゃん言ってくれたって。
木下 裏方だから、わかんないけど。
祐介 だったらなおさら。
木下 いや。
祐介 行かないって。
木下 変わった？私？
祐介 ううん。
木下 そう？
祐介 年とったくらいかな。
木下 失礼ね。
祐介 冗談だよ。
木下 冗談ってのは、本当はそう思っているから、いうんだよ。本当のことをいうために、
冗談にかくして、わからないように。
祐介 ちがうよ。なんだよそれ。
木下 だって、シヨックだもん。
祐介 変わってないよ。あの頃まま。
木下 気持ちのこもってないことば。
祐介 本当だって、なんだか俺だけ年をとったみたいだなあ。木下は変わってない、うらやましい。
木下 ……
祐介 冗談だよ。
木下 冗談？
祐介 うなずく
木下 じゃあ、本当なんだ。
祐介 ？
木下 冗談なんでしょ。
祐介 ……ややこしいよ。どっちでもいいだろ。そんなの。

木下 どっちでもいい。
祐介 なんなんだよ。

二人とも、体をくずすなど、よりリラックスする。

木下 なんだか、変わったね。

祐介 ん。

木下 祐介。

祐介 そう？

木下 髪とか、短いし。(似合わないと思って、おかしい)

祐介 そりゃ。まあ。

木下 腰くらいまであったよね。

祐介 あったな。

木下 だっさ。

祐介 かっこよかったんだって。あれが。

木下 まだ、やってるの。

祐介 なに。バンド。

木下 うん。

祐介 まさか。

木下 へえ。

祐介 仕事でバタバタしてるうちに、いつの間にか。

木下 ずいぶん長い間バタバタしてるんだね。

祐介、コーヒーを飲む。木下、それを見る。

木下 ねえ、よりもどそつか。

祐介 ・・・だから、急に言われても。

木下 急じゃないよ、さっきも言った。

祐介 急だよ。

木下 どうして？何かどうしても駄目な理由でもあるの？

祐介 べつにそういうわけじゃないけど。

木下 じゃ、いいじゃない。問題なしだよ。

祐介 簡単だな。

木下 そんなものよ。

祐介 そんなもの？

木下 1人暮らしって、つまらないでしょ。

祐介 そんなことないよ。

木下 適当にご飯つくって、野球の中継見て、いつの間にかオヤスミ。

祐介 よくわかってるな。

木下 一応ね。

木下 退屈して友達に電話とかメールしても、その先にはその先の暮らしてもものがあるの。

祐介 しないよそんなこと。

木下 みんな忙しいのね。仕事だの生活だの婚活だの。

祐介 はは。

木下 どう？

祐介 いつものことだよ。

木下 そこに、ビールとつまみをコンビニで買ってきた、私があるの。

祐介 うん。

木下 どう？

祐介 どうって？

木下 うれしくない？

祐介 うん。

木下 好きとかそんなのじゃなくていいから。

祐介 は？

木下 紛らわすだけ。

祐介 ……は？

木下 退屈ですこし寂しいのを。

祐介 なに、それ。

木下 だって退屈しないよ。

祐介 まあ。

木下 どうして無理しないといけないの？

祐介 どうしてって。

木下 簡単に紛らわせられるのよ。ふたりでいけば。

祐介 ……。

木下 だから、そうしよ。

祐介 簡単に言うんだな。

木下 簡単だって言ってるじゃない。

祐介 そうじゃなくてさ。

木下 慣れたつもりだったんだけど。たまに、やっぱり、あるんだって。つらくいい日だ。

祐介 深刻なのか深刻じゃないのかわからないよ。

木下 だから、だれでもいいの。

祐介 ……なんだよそれ。

木下 なに、その顔。

祐介 何が。

木下 紛らわすだけ。

祐介 ……。

木下 うそ、ほんと、誰でもいいわけじゃない。

祐介 ？

木下 祐介じゃないとできない。

祐介 なに。

木下 紛らわすの。

祐介 どうして？

木下 わからない。でもわかる。わからない？

祐介 ・・・なんとなく。

木下 久しぶりね。

祐介 さっきも言ったよ。

木下 そう？

木下、立ち上がる。

木下 ちよっと行ってくるね。

祐介 どこ行くの。

木下 さんぽ。

祐介 俺は？

木下 何か買ってくるね。何がいい？

祐介 え？ああ、なんでもいい。冷たいの。

木下 ん。

木下、出て行く。祐介、ひとりのこされる。

退屈する。部屋の中を見回してみる。いろいろ、見てしまいそうになる。

いや、引き出しの中とか写真とか、なんなら下着とか、見てしまう。

いかんいかん、と思う。気を紛らわそうと、テレビのリモコンを探す。

リモコンを見つけ、テレビをつける。・・・が、つかない。

リモコンの電池が切れているのだ。仕方なく、直接テレビのスイッチを入れる。

ノイズ画面になる。チャンネルを変えてみる。やはりノイズ画面だ。

テレビはあきらめて、消す。横になる。そのまま時間が経過し、徐々に雨音が忍び寄る。

雨音が大きくなる。ふいに車のスリップ音。何かにぶつかる音。

祐介起き上がるが、ぼんやりしている。木下がいらないことを確認して再び眠る。

溶暗。雨音は徐々に遠ざかり、やがて、きえる。

明かりが入ると、一時間くらい経っていて、辺りは暗くなっている。コーヒーは

冷めてぬるくなっている。木下、スーパーの袋を持って入ってくる。

祐介は眠っている。

木下 ごめん、ただいま！

木下、玄関でいっばいに傘の入った傘立てを倒してしまう。

木下 いや、もう。

木下、倒れてしまった傘を片つける。祐介、起きる。

祐介 あ、おかえり。ごめん寝てた。

祐介、玄関で傘と戦っている木下に気がつく。

祐介 何してるの？

木下 なんでもない、傘立て倒しただけ。

祐介、手伝う。

祐介 どうして、こんなにいっぱいあるの？

木下 集めてるの。

祐介 傘を？

木下 そうよ。

祐介 へえ。

木下 うそよ。

祐介 え。

木下 天気予報を見ない派だから、外で雨にあうたびに傘買うから。

祐介 そんな派があるの。

木下 入る？天気予報見ない派？

祐介 いいよ。困りそうだから。傘もつたいないし。

木下 だから、もう雨にあっても傘を買わないことにしたの。

祐介 天気予報を見ればいいだろ。

木下 天気予報見ない派が天気予報見たら、天気予報見ない派じゃなくなっちゃうじゃない。

祐介 ……そっか。

木下 寝てたの？

祐介 うん。

木下 おかしい。授業中に居眠りした生徒みたいに、線が入ってる。

木下、ほっぺたの線をなぞる。

木下 ここ。

祐介は、すこしどきどきして、なぞられたあとをなぞってみる。

祐介 よく寝た。(笑う)

木下、スーパーの袋から冷たいお茶をだして祐介に渡す。

木下 はい、冷たいの。

祐介 ありがとう。

祐介、あけて飲む。

祐介 うまい。

祐介、また飲む。

木下にとって、その光景はなんだか滑稽に見える。

木下 よくまあ、こんな短い間に寝汗かくほど寝られるわね。

祐介、少し笑う

木下 事故あったの気が付いた？

祐介 え、知らない。

木下 家の前で。電柱にぶつかっただけみたいで、大したことなさそうだけど。

祐介 へえ。

木下 平和だね。

祐介 図々しいよな。人んちで。

木下 ほんと。いいけど。何か食べる？作るよ。

祐介 え。

木下 それとも、外行く？

祐介 雨は。

木下 やんでる。

祐介 そう。

木下 もう帰る？

祐介 んん。

木下 何か作ろうか？

祐介 うん。

木下 なにがいい？

祐介 なんでもいい。

木下 オムライスでいい？

祐介 ありがとう。

木下 懐かしいね。

祐介 なに？

木下 昔、大学るとき。

祐介 ああ。よくつくってもらったよな。

木下 よくつくらされた。
祐介 (馬鹿にしたように) それしか作れなかったとか？
木下 (流す) はいはい。どうして、別れたんだっけ。
祐介 どうしてかな。忘れた。
木下 私だったよね。
祐介 ……。
木下 あっ。
祐介 なに？
木下 まって。

木下、スーパーの袋の中を探る。

木下 やっぱり、卵がない。
祐介 なんだそれ。買い物行ったんじゃないの？
木下 忘れることくらいある。人間だもん。
祐介 別に卵無くてもいいよ。
木下 チキンライスってこと？
祐介 ……。
木下 おなか空いてる？
祐介 それほどでも。
木下 じゃ、あとで買いに行く。
祐介 いいって。

木下、座る。

祐介 ……テレビ。
木下 ああもうつんない。
祐介 だよね。

窓を開けに行く。
窓が開く。外から車の走る音が飛び込んでくる。
以降、しばらく車の音が不規則に入る。

祐介 寒くない。
木下 ちようどいい。
祐介 そう？

祐介も窓へ。

祐介 けっこううるさいよな、この辺。

木下 道路広くしたから。車増えたんじゃない。

祐介 逆だろ。

木下 そうかな？

祐介 マンション増えたよなあ。

木下 こもじき立ち退きらしいし。

祐介 へえ。

木下 大家さんに相談された。

祐介 ふうん。

木下 ちよつとお金もらえるみたい。

祐介 ちよつとなの。

木下 交渉みたいなのとか、苦手だし。

木下、窓の外をぼんやりと見ている。

祐介 隣、どうなったの。

木下 となり。

祐介 ほら、やばそうなおっさんと。おくさん。

木下 ああ、喧嘩ばっかしてた。

祐介 そう。

木下 もう大変だった。

祐介 もういないの。

木下 うん。でも、ずつといた。結構長い間。

祐介 ずつとあの調子で。

木下 ううん、どんどんひどくなっていった。

祐介 よく続くよなそれで。

木下 苦情も言ったし、警察も何回か呼んだし。

祐介 そこまで。

木下 あんまり酷いから、最後はこつちが引つ越そうとしたんだけど。

祐介 ふうん。

木下 結婚してた時ね。

祐介 ふうん。

木下 でも、出て行った。

祐介 ……。

木下 その夫婦がね。

祐介 ああ。別れたの。

木下 さあ。でも、なんとなく、一緒にいる気がする。最後刺し違えて死ぬんだと思う。

祐介 ……。

木下 懐かしいね。これ。こういうの。

祐介 こんなことってあったっけ。

木下 あったんじゃない。懐かしい気がするってことは。
祐介 じゃ、懐かしいな。
木下 変なの。
祐介 あ、いい匂いしない。
木下 そう。
祐介 世の中は晩御飯か。
木下 おなかすいてるの。
祐介 ちがうちがう。大丈夫だって。
木下 祐介、すごいね。
祐介 なにが？
木下 ひとりで。
祐介 なに？
木下 耐えてる。
祐介 ん？
木下 寂しくせに。
祐介 は。
木下 いいよ。
祐介 なにが。
木下 さっきの。
祐介 え？
木下 ヨリ戻そうっての。
祐介 いいって？
木下 戻さなくていい。
祐介 どうして？
木下 成り立たないから。
祐介 えっ。
木下 紛らわせられない同士でしか成り立たないでしょ。
祐介 ……
木下 バカみたい。ああ恥ずかし。
祐介 ん？
木下 紛らわすだけ、なのに。
祐介 なぁどうして？
木下 ないものねだりは、しないから。
祐介 ないものねだり……。
木下 でも、本当ははしてるね。私。
祐介 よくわからない。
木下 でも、祐介は本当にしないね。
祐介 何を？
木下 ないものねだり、
祐介 ないものねだりって？

木下 ないものねだりは、ないものねだりよ。ないものをねだること。
祐介 そんなこと、わかってるよ。

突然真っ暗になる。

祐介 え。なに？

木下 ブレーカー。下のおばさんがよく落とすの。

祐介 懐中電灯か何かはないの？

木下 ある。

祐介 取りに行ける？

木下 電池がない。

祐介 なんだそれ。

木下 いいじゃない。このままで。

祐介 いいか？

木下 もう。

木下、暗闇の中、玄関のほうへ行き。

木下 おばさん！

祐介 ああ、いいよいいよ。

木下、玄関を閉める。

祐介 なあ。

木下 なに？

祐介 ちゃんと話せよ。

木下 言ったままだもん。より戻そうかなー、なんて思っただけ。

祐介 どうして急そんなこと思ったの？

木下 知らない。思い立ったら、我慢できなかった。

祐介 さっきの、ほんとうなの？

木下 なに？

祐介 紛らわすだけ。

木下 それだけ。たぶん。

祐介 なんだよ、それ。自分から去っておいて、突然そんなこといわれても。

木下 別に気にしなればいいじゃない。

祐介 俺には俺の暮らしのリズムができてる。とっくに。

木下 そうね。

木下、懐中電灯を取りに行く

祐介、暗闇の中、木下の去る気配を感じて

祐介 急に、木下がいなくなつて、わけがわからなかった。あのとき。全部どうでもよく
なつた。

木下 びっくりした。いつの話してるの。

祐介 出たつたときだよ。

木下 意外。私には祐介に必要とされてる感じがしなかったのになあ。

祐介 ひつかきまわさないでくれ。急に消えてたり、出てきたり。より戻そうとか、好き
と

かじやないとか、紛らわすだけとか。わからないよ。昔も、今も。

木下 いいじゃない。結局は別々の人間なんだから。

木下、懐中電灯で祐介の顔を照らす。

木下 ……こわつ。

祐介 なんだよ。

木下 今の私は祐介を必要とした。

祐介 電池、あつたの。

木下 うん。

祐介 そう。

木下 わかる？

祐介、熟考した後、うなづく。

木下、懐中電灯を消す。

祐介 俺も。

祐介 なに？

祐介 ある。急に。そんな、感じになるの。

木下 へえ。

祐介 やりきれなかったり、何もなくて怖くなつたり。

木下 ほう。

祐介 それに、慣れたり、抵抗したり、負けたり勝つたり。

木下 なるほど。

祐介 特にこんな日。外に出たくなくなるくらい気持ちのいい夜に。

木下 停電の日は？

祐介 停電？

木下 うん、たとえば、今日みたいな、停電の日。

祐介 停電なんて滅多にないからな。

木下 なんだか、すこし、うれしくない？

祐介 うん、すこし、うれしいかな。

木下 うち、しょっちゅうよ。いいでしょ。

祐介 ちよつとうらやましいかな。

木下 いい風。

祐介 うん。

木下 今日は許そう。心地いい空気も、楽しそうな雰囲気も。

祐介 ……

木下 どこに引越そうかなあ。

信号が変わったようで、車が走り出す。

ディーゼルのトラックも混ざっている。

電気、点く。

祐介 あっ。

木下 なんだ。楽しかったのに。ほんと空気の読めないおばさん。

祐介 はは。

木下 なんだか真つ暗な中に人がいるみたいだった。

祐介 みたいじゃないよ。いたし。俺。

木下 ちがう。

祐介 ちがうの。なに、幽霊。

木下 うん。幽霊。22歳の祐介の幽霊。

祐介 なんだよそれ。

木下 幽霊。きゃー。

木下、祐介から逃げるように離れ玄関へ。

祐介 なんだよ。

木下、玄関を開ける。大声で。

木下 でかした！おばさん。

祐介 おいおい。

木下 冗談。

祐介 大丈夫か。

木下 飲む？

祐介 なに。

木下 これ。(コーヒー)

祐介 いいよ。さめてるし。

木下 ありがと。

祐介 ん。

木下 えらい。

祐介 なにえらいって。

木下 えらい。
祐介 はあ？腹減った。
木下 別の作ろうか？
祐介 いい。卵、買ってくるよ。久しぶりに食べてみたいし。
木下 傘、かそうか？いっぱいあるよ。
祐介 雨降ってないんだし。
木下 降るかもよ、突然。
祐介 大丈夫だろ。何かいる？
木下 ううん。
祐介 じゃ、いつてくる。
木下 ねえ。
祐介 なに？
木下 帰ってくる。
祐介 そりゃ。卵買うだけだよ。
木下 じゃあ。
祐介 じゃあつて。
木下 あそうだ。ならビールも買ってきて。
祐介 うん。
木下 で、飯食って飲んで。
祐介 そうだな。
木下 そして帰るか。
祐介 ……うん。
木下 で、もう会わない。
祐介 ……。
木下 いや気が向いたら会おうか。
祐介 うん。
木下 それでだらだらいこうか。どっちかの気が変わるまで。
祐介 いや。
木下 実際そうだし。
祐介 ……。
木下 そのほうが、大切にできる。お互い。
祐介 木下あのみ。
木下 そのほうが簡単でしょ。
祐介 え。
木下 前向き？後ろ向き？
祐介 木下？

木下、うなづく。

祐介、木下の肩に手をかけようとするが、
木下、それを退ける。

祐介
・・・。

木下、祐介にカバンを渡す。

木下
買い物は？

木下の携帯が鳴っている。

祐介
・・・行ってくる。

祐介、出ていく。

木下の携帯のバイブが再び鳴り出す。

徐々に明かりが落ちる。

木下の携帯の着信の画面の光だけが残る。

激しく往来する車の音が飛び込んでくる。

携帯の画面の明かりも消える。

車の走る音は、まるで外に居るかのように大きくなる。

アイドリングのエンジン音、歩行者信号の音、雑踏の音など。

木下のアパートの無くなった後、まるでその跡地に居るみたいになる。

おしまい。

上演にあたっての注意事項

(1) 上演にあたっては劇団または著作者の承諾を得てください。

(著作者) 南出謙吾

Mail minamidek@gmail.com

X @minamidek